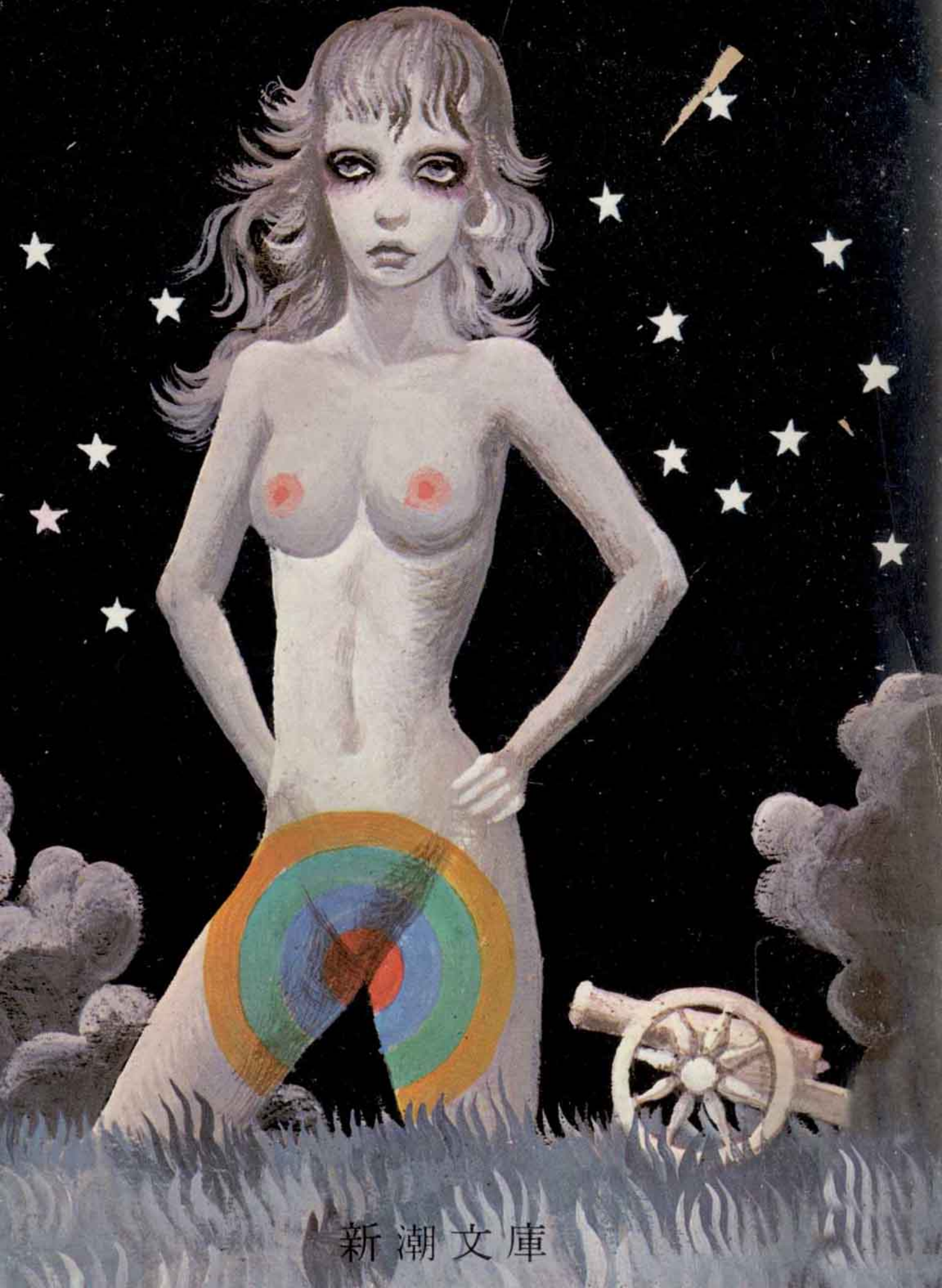
真夜中のマリア

野坂昭如



新潮文庫

真夜中のマリア

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草112 B

昭和四十六年六月十日 発行
昭和五十三年一月三十日 十二刷

著者 野坂昭如

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊐ 印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Akiyuki Nosaka 1971　Printed in Japan

新潮文庫

真夜中のマリア

野坂昭如著

新潮社版

1979

真夜中のマリア

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

カン一族の系譜

カンは目覚めると、今日は気障に生きてみようとまず考え、それは頭のどこかに、買ったばかりのフルートの、軽やかにして芯はしぶといその硬質の肌ざわり、残っていたからに相違なく、つづいて渡辺貞夫の鬚を、思い浮べた。

フルートは気障な楽器だ、武器にもなるし、肩たたきにも使える、貴族、乞食いずれにも似合って、しかもギターのように甘ったれていない。

渡辺貞夫と焼酎汲みかわしつ、パーカーのイデオムを論じ、「あんたぁなんだね、音にしろテクニックにしろ、フィリー・ウッズ、マリアノよりゃよほどすぐれてるよ。それがいつまでもパーカーの亡霊にとりつかれてるなんざ、歯がゆくってさ」なんどといいつつ肩をたたく。ついでに一曲教わる。こりゃ本因坊に指導碁打ってもらうようなもんだ。いや、碁を打ちつつ、相手の長考の間、廊下に出てフルート吹くなんざ気障じゃないかな。名も知れぬ鳥がわがフルートの調べにきき惚れて、けっ、名も知れぬ鳥か。鳥にしてみりゃ手前の名など知ったこっちゃねぇや。小島功ってうまいことといってるなあ。「食用蛙がもし自分の名前を知ったら、カンカンに怒るだ

ろう」って、そりゃそうだ。ボーンボーンとでっかい図体でないてるなあ、なにも食用のためじゃねぇよな。しかし人間にもいる。さしずめ「名も知れぬ鳥がアパートの窓の外でゆらゆら枝をゆらせながらとまっています。今、とっても会いたい、とっても愛してる」なんて手紙昨日寄こした女高生など、発情人間てぇとこか。妊娠人間、オルガ人間、失神人間、出産人間、メンス人間、バルトリ人間、クリトリ人間、人間てつけると、みんなアホらしくきこえる。サラリー人間、大臣人間、社長人間、作家人間、タレント人間、亭主人間、ナベサダはフルート人間か、俺はなんだ。

「俺はなんだ」と、急に問いかけられたような気がして、カンは、今度こそはっきり目をさました。なまじ女高生のことなど考えたせいか、浮世絵風に勃起していて、フルートにあてがったら、すさまじい音色を立てそうだ。

これができたら食いっぱぐれはない。冗談じゃない、花電車の逆ってぇ奴だ、俺はあれまだみたことないけれども。ペニスでペニスの舟唄なんぞ演奏したら、こら気障だろうか。

カンの部屋は、地下六米のところにあって、これは戦時中の防空壕。華族であり地主であった祖父が、その金にあかせて収集した骨董品のうち、高価なものは疎開させたが、座右に置いてながめていたい壺や、季節の掛軸など、空襲の際ここへしまうつもりが幸か不幸か焼けずにすんで、両親と祖母、妹、召使は地上に住み、カン一人十二畳ばかりの、コンクリートで固めた穴倉に別居している。

父は、祖父の死後、その遺徳たたえる財団法人をつくり、そこに収集品一切まかせて、つまりは美術館、広すぎる邸宅の三分の一ばかりをこれにあて、各地の山林管理する会社設立して社長におさまり、まずまずの暮しぶりだった。

気障に生きるからには、やはり風変りに装わねばならぬ。カンはこれも祖父が若き日に、サーカスの玉乗りの少女に惚れて、天幕小屋へ通いつめ、通いつめるうちその団長の部屋におかれた船箪笥に目をとめ、少女ともどもゆずり受けたという、かつては平戸、八幡船の親方の所有していた時代物、そのいちばん上の抽出しから晒一反とり出し、まっ白な歯をむき出し、ほどよい長さにピッと引き裂くと、はやりたてる逸物なだめすかして、キリッと下腹部にまきつける。

ネクタイの結び方はあれこれうるさくても、褌の締め方を二種類以上心得ている男が果して何人いることか。

まず先端を顎でおさえ、前から後ろに股くぐらせ、胴を二巻きにしたところで、股くぐらせた部分にひっかけ逆に締めてとめる。これすなわち漁師締め、二巻きをまず胴にして、体の正中線上で一つ結び、一方を股くぐりさせ、胴の部分くぐらせて、前に蝶の形にととのえるのが、海賊締め、全体の半ばあたりを顎でとめ、まあいい、カンはごく当り前の形すなわち漁師締めにして、歯ぶらしをくわえ、歯こそは、人体の中でもっとも堅い部分で、妊婦でもないかぎり、そう個人差のあるものではない。沢村忠も丸山明宏も、歯だけくらべりゃ強さは同じ。つまり人類平等に与えられた武器なのだから、これを錆びつかせてはならぬのだ。

できれば、ヤスリで磨きたいくらいだが、それでは自分の口を切ってしまう。ゴロゴロガーップッと、肺活量八千二百にものいわせ、カンは、昨夜のハイミナと煙草のヤニと、さまざまな唇の感触と、シナチクのカスふきとばし、ひたとわが面に見入る。

おばあさまの話によると、カンはひいおじいさまに似ているそうで、ということはきわめて淫蕩な血が流れているにちがいない。おばあさまは、カンをみるたび、「まあまあ、お父上にますますそっくりでいらっしゃる。おなつかしい。お父上はそれはそれは立派な男性でしたよ」うっとりよだれ流さんばかりにし、今年、六十八歳になる老女の、パパ・コンプレックスなんてゾッとしないが、おばあさまの気に入られていると、便利なこともある。褌もそうだし、漢方薬の知識なんてえのも仕入れることができるもんな。

カルダンのスーツに熊の胆など、しゃれている。大体がフランスと中国は、関係がないでもない、ラディゲの小説の人物の名と、中共首席のそれは同じ発音だし。

カンは淫蕩な顔に日本旧陸軍の戦闘帽をかぶり、あしもとを、全学連ML派が東大で使用したという古い地下足袋でかため、フルートをにぎりしめると地上へあらわれる。地上は夕刻で、もやが地表にうすくたなびいている。一万坪ばかりの芝生と、その庭をさらに広くみせるようおもんぱかって配置された樹木のたたずまいをながめ、地下に生活することはいいことで、カンは六米の階段の急な傾斜伝わって表へ出るたびに、あたらしく生れかわったような気分になる。自分はどうしてここにいるのか、実ははるかなる天空の、ちいさな星の住人で、けっ、ちいさな星の

王子様か。一人乗りの宇宙船が軌道はずれたら、乗組員はどうするだろうか。オナニーのしづめではないか、他に楽しみはなかろう。星の王子さまマスターベーションの図などおもしろいかもしれぬ。サンテクジュペリってぇ人怒るかな。

ふっと、焚火の臭いがして、これはもやではない。落ち葉たく煙とわかる。

松、くぬぎ、椎、ヒマラヤ杉の木立ちの、祖父は泥棒をおそれて、防空壕の入口を、築山のようにカムフラージュしていたから、見知らぬ人がみれば、あたかも森の奥からふと湧き出た半獣神の如く、カンは、戦闘帽、褌、地下足袋姿にフルートを正しく支え、今のところ演奏できるのは按摩の笛だけだから、タラリーラリラリラリラリラーラァとくりかえして、しずかに庭の中央へ、能役者の橋懸りすすむように、しずかに歩む。

「いやぁねえ、お兄ちゃん。またへんな格好して」妹の真由美が、イタリアルネサンス風ファッサードから身をのり出して手をふった。別にそういやがってる風でもない。この家で、たとえば、今のカンのスタイルにいちいちおどろいていては、身が持たぬ。

おばあさまは、常の老人とことなって、若いうちこそ和服召したこともあるらしいが、今は鹿鳴館時代のコスチュームに凝って、これは別に明治百年ことほいでのことではない。若いうち、その敬慕した父上の、好みがよみがえったわけで、裾を長くひき、お菓子のような帽子かぶり、胸にも腕にも歩くたび派手な音立てる飾りをつけて、はばかりへいく時も、散策、そして趣味のカンバスにむかう時も、同じ姿、TPOなどといやしいことはおっしゃらぬ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

父は五婚していて、そのうち四人までに子供をうませ、華族のなれの果てにしては、たくましいといえる。

カンは、最初の妻の子供で、今年十七歳になり、身長一米八十五。顔立ちは、変幻自在おもむくままにかえることができた、まだ責任とらねばならぬという中年に間があるのだ。ジープとフルート、少し前まではクラブサンに凝っていたのだが、女友達の一人が、「私もクラブサン大好き」といい、よくたずねると、クラブサンドイッチのことで、それからいやになった。

クラブサンの前は大正琴、その前が笹笛、その前がトランペットのマウスピース、その前が陸軍ラッパ、その前がチャルメラであった。

チャルメラなど馬鹿にするかも知れぬが、まず麦藁をお湯にひたしやわらかくしたところで、うすく削り、それを弁にするのであって、肺活量が大きくないと音が出ない。

「八路軍が夜襲の時チャルメラふいてやってくるんだ。こりゃ、怖ろしいもんだよ」御多分にもれず、父は戦争の話が好きで、へーぇと感心したし、その怖さもわかった。思い立って夜毎庭で練習したら、五人目の母に産れたばかりの赤ん坊が、パピピーピピときくたび、ひきつけを起し、禁じられた。

とにかくその他にも、ディズニー時計と仙台平の袴、しびんおまるのコレクション。これは実用性からうまれたもので、地下室にははばかりがないから、これに用を足す。

足したら後は、庭に捨てればよい。ウンコをトイレットでするなんてぇのは、これは貧乏人の

習性であって、庭がせまいから臭かったり、目についたりもしよう。

一万坪もありゃ、まず大丈夫なのだ。そして靴と同じく、しびんおまるにも使いやすいのと、そうでないのがあって、比較研究するうち数がそろった。しびんとはミもフタもない語感だが、「おまる」というのはきれいだな。バルドー、ダニー・カレル、マリー・ラフォレの尻にふさわしい。

日本のファッションモデルなど、骨がつかえて使えめぇ。ああ一度、バルドーを連れて来て、やさしくおまるあてがってやりたい。あーいうのをおまるヒップというんだな。

まだもろもろの家具調度、什器、骨董類はあるけれど、後に紹介するとして、カンは腹が減った。

食堂に入ると、五人目の母が、ビキニ姿で、アカプルコ、アカプル湖だったか、なにしろその砂浜にでもいるように、熊の毛皮の上にねそべり、「おはようございます」元気よく挨拶した。

彼女は、もとTVタレントだったから、挨拶だけは威勢がいい。それに反比例して、食卓の上は貧相で、ふりかけが三種類。もとのスポンサーの製品で「だって私をはじめて起用してくれたんですもの。恩がえしよ」といい、祖母は今どき義理堅いお人だと感心している。

三種類のふりかけ、マイミクスチュアにして、冷えきった飯にかざり、水ぶっかけて、カンは六ぜん食べた。発達した腹筋が、胃壁をおさえているから、みぞおちのふくれるような、ぶざまさはない。

「どう？　近頃、モテてる？」熊の毛皮をなでながら、五人目の母がたずねる。ふりかけのそばに、生理用品の箱がある。五人目の母は、生理人間で、いや、手当て人間というべきか。生理用品のあたらしいのがでると、すぐにためしてみる。

コップにいっぱいの水をはり、円筒型のちいさな綿のかたまりを、一方の端についた紐でつり下げ、コップにひたして、「あら、本当に吸いこんじゃったわ」と感心したり、わらじみたいなのを、各種買いこんで、分解し、比較検討してみたり、しかし、これだけは男に真似できぬたのしみであろう。なにごとも経験と、五人目の母のタンポンを、肛門に入れてみたことがあるが、そのあたりの水っ気、吸いこんじまったとみえて、引き出すのに苦労した。もっともスーパーサイズだったせいかも知れぬ。ジュニアならいいが、薬屋でスーパーくださいなんてってはずかしくないものだろうか。タンポンにサイズの差があるなら、コンドームにもあっていいはずではないか。いや、もっとあれをたのしくする工夫を考えるべきだ。

サイケデリックサックとか、横尾忠則の絵のついたのや、そういえば、彼の絵は、一度みたことのある、ビラビラのついた、しかも赤や青にそのビラビラの一枚ずつ彩色された変形サックによく似ている。〜湯上がりの匂い、棒のついたホーデン、さびしそうな出べそ、ふいに母が唄い出した。父はたしかに出べそで、風呂が好きだ。とすると、これは、母の恋唄にちがいない。

急に、父がねたましくなり、カンは、しかたない、名も知れぬ鳥の女でも抱いてやるか。立ち上がると、フルートを手にもち、「何時におかえり？」「そうだな、六時頃かな」ニッコリ五度目

が笑った。

もちろん朝の六時で、それならばきいてもしかたがないのに、いつもたずねる。まるで、それが母の義務であるかのように。

カンは暁方がすきだった。大都会とはいっても、くらやみから、ほの明るく、あの薄い膜の一枚一枚はがれていくような、青みがかり、生れたばかりの朝は、ひよわで、しかしすぐに、深い水の色になり、それも束の間。白っぽくかわり、となったらもう駄目だ。

人間の処女はともかく、空の処女はいい。夜明けごとに太陽に犯されて、しかも夜毎あたらしく生れかわる。

暁の街を歩くのはいいことだ。まだ、さきほどのほてりを体の芯にとどめながら、清少納言ではないが、やはり冬だな。寒さに皮膚あおざめた少女と、暁の舗道を歩くのはいい。

化粧おとした女が、美しくみえるのは、この時だけだ。すがりつくように腕さしのべるのを、ことさら気づかぬふりで、足ばやに歩く。寝の足りてない、しかも色ごとにふけった後の少女の顔は、まこと暁の空と、よく似合う。

魚になったような気がする。それも深海魚だ。そうだ、「魚にならない？」こういってさそってやろう。「お茶のまない？」「おや、どこで会ったんだっけ」「ドライブしよう」など、なんて、まあくだらないんだ。今日は気障に生きる日。フルートを小脇に抱いて、これは喧嘩にもつかえるしな。女ひっかける前に、しばらくぶりで道場へいくか。「三段の実力はある。昇段試験うけ

なさい」先生がいってたけど、段なんてなんだ。年みたいなものじゃないか。初段には、若さがあるけれど、三段四段なんて、年寄りじみている。「おんどれ、なにいうてけつかんねん。いてもうたろか。骨わやにしたろか」東京下町うまれで、喧嘩の時だけ河内弁かなにか使うのも、気障ではないだろうか。持ったるフルート青眼にかまえ、やがてその剣先しずかにおりたかと思うと、大きな円をえがきはじめる。いつか試合の時、眠狂四郎の真似したら、ずいぶんしかられたっけ。

カンは、フルート二、三度素振りすると、地下室にとびこみ、壁一面おおいかくす洋服をえらんで、結局はヤッケにコットンパンツの全共闘スタイル、あのスタイル冬はいいが、夏は暑かろう、革命は冬にかぎるか、チューンナップしたジープ駆り立て、巷へとび出した。

目指すは、三の輪の骨董品屋、祖父秘蔵の浮世絵のうち北斎の初刷り一枚。まずこれをさばいて金をつくる。二、三十万にはなるはず。そして、後はお魚を探す。

雨が降って来た。ペーブメントは、まるで水族館のようにみえた。青年は荒野をめざし、店子はオーヤ、泥棒ローヤで、ばあさんコーヤサンをめざす。くだらぬことを考えてたら、追突しそうになり、カンはフルートで、カン高く按摩の笛吹きならす。

フーテン仲間

カンはジープを三の輪の骨董屋から、山谷ドヤ街の中にあるクラブ『胡座』へむかわせる。胡座はすなわちアグラで、正確には安愚楽ともかく。今をはやりのアングラの語源はここより来ていて、安手な愚かしいことを楽しむ意味なのだ。アングラ劇場などと粋がっていても、モトを正せば大したことではない。

骨董屋の親父は、北斎の春画を、商売気はなれた好色そうな目つきでためつすがめつし、その中の一枚は、女の湯上がり洗い髪姿、腰巻き一つで、しかも両脚むき出しとなり、その掌合わせたようなあたり、すさまじい剛毛が密生していて針ねずみの如く、カンはながめながら、ふと三番目の母親を思い出した。父の初婚つまりカンの母親や、再婚すなわち妹真由美の母などは、由緒正しき家柄の娘であったが、三婚目となると、父もいい加減面倒になったらしく、ストリッパーあがりの女を妻とし、この継母は、風呂へ入るたび、ということは裸になるとステージが恋しくなるのか、脱衣場で突如踊り出し、身をくねらせ、カンのみたところ、たしかに火炎の如くにそそりたつ毛の按配、北斎の絵にそっくりであった。

「どう、きれいでしょ。これが女の体なのよ」継母は腰をふりながら、カンの姿みとめると近づ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com